

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02543

研究課題名(和文)17世紀以降のアイランド文学における土着の言語文化の再構築と愛国意識の相関関係

研究課題名(英文)The interrelationship between the patriotic consciousness and the reconstruction of indigenous language and culture in Irish literature since the 17th century

研究代表者

池田 寛子 (Ikeda, Hiroko)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：90336917

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：土着の伝統を意識的に取り入れたアイランドの英語およびアイランド語の文学作品を精査した。とりわけ7世紀アイランドの王スウィーニーをめぐる伝説に焦点を絞り、過去との対話を未来につなげる試みを分析した。調査の過程で20世紀初めに英訳されたスウィーニー伝説の重要性が明らかになり、この伝説に基づいた翻案作品を網羅的に調査し、精読した。近現代のアイランド文学者たちはアイランド語とその伝統に真摯に向き合うことによって逆にナショナリズムや愛国意識を越えたグローバルな観点を獲得し、長い目で今と未来を考える上で有効な視座を提供している。その詳細を徹底的に精査し、研究発表、講演、論文の形で公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の柱は、アイランドの文学者たちの土着の伝統との対話の精査とその詳細の分析である。言語、文化、文化的伝統に対する彼らの深い思い入れは、愛国意識を越え、地球全体の未来を視野に入れた観点の獲得に寄与している。グローバル化における「愛国」の意味を考えるに際して、自らの母国の日本ではなく「アイランド」の事例を追及することで複眼的な立脚点を持つに至った。また、精緻な文学作品の多層性の解明を通じて、AIの到達できない人間の知の真髄に迫ること、そのプロセスの意義を確認した。この研究成果を出版や講義の形で広く公開していくことが使命である。

研究成果の概要(英文)：This study achieved a close examination of literary works in English and Irish by Irish writers deeply rooted in native tradition. Special attention is paid to the legend of King Sweeney which leads many writers to intensive dialogue with the past in search of future. The legend, originally written in Irish and translated at the beginning of the 20th century, has produced various adaptations. Delving into the native tradition in turn enables Irish writers to reach globally applicable messages and implications in Sweeney's story, which are highlighted particularly in recent works. Reimagining the fate of Sweeney is to meditate on the future of Ireland and beyond. The way Irish writers take a long view involves striking and revealing implications for future generations. The details of my research have been publicized in the form of articles and lectures.

研究分野：アイランド文学

キーワード：英語文学 アイランド語文学 アイランド語

1. 研究開始当初の背景

国内の研究動向: アイルランド語の言語文化の多角的な解明を目的とした国内唯一の**共同研究**(基盤研究(C)「アイルランド語で表現された媒体を用いたアイルランド文化の総合的研究」(アイルランド語文献と音声資料による近代アイルランド言語文化の多角的研究))に関わり、これを土台として筆者は**個人研究**として独自にアイルランド語文学と英語文学の関係性を重視するという観点から、若手研究(B)「19世紀以降のアイルランド文学における文化と言語の多元性の研究」、若手研究(B)「二十世紀アイルランドにおける英語文学とアイルランド語文学の相関関係」、基盤研究(C)「18世紀以降のアイルランド文学におけるアイルランド語の伝統」を計画し、研究を進めてきた。「アイルランド語」とその伝統はアイルランドの「独立運動」や「愛国意識」と深く関わってきたが、その伝統が文学作品に取り入れられた際、愛国意識の限界を超えるような逸脱や、伝統のみならず国民意識の変革の可能性を提示し始めることに気づいた。その現代的意味の解明により、アイルランド文学研究に留まらず、言語と愛国意識をめぐる議論に示唆を与えようと考えた。

国外の研究動向: アイルランド語を基盤としたアイルランド土着の伝統が今日までアイルランド人の愛国意識と密接な関係を保ってきたことは知られる。この伝統は北アイルランド紛争において過激な民族主義者に政治的なプロパガンダに利用された。このためアイルランド語が極端なナショナリズムと結び付けて考えられてしまうという弊害が生じたことが指摘される。アイルランド語の政治的な意味づけが強化された結果、その言語文化に対しては内向きで排他的なイメージも生まれたが、実際はそうではない。アイルランド語と英語、双方の言語文化の接点を認識し、その断絶を埋める試みの重要性は国外の研究者の間で認識されており、本研究はその実現化の一端を担う。アイルランド文学に表われた愛国意識の全容に迫る上で民族的宗教的なしがらみのない客観的な立場は有効であるが、デリケートな問題であり、慎重さが要求される。

2. 研究の目的

アイルランド古来の伝統は、今日までアイルランド人の愛国意識と密接に関わってきた。本研究ではアイルランド文学における土着の伝統の変容の意味を分析し、あるべき「愛国」の形を模索するアイルランド文学者たちの創造的な試みの意義を解き明かす。アイルランドは植民地化と英語化によって土着の文化・文学が存続の危機に瀕した一方、それに対する反動が起こった。アイルランド語衰退の始まりは愛国意識の芽生えと同期する。歴史的、社会的な変動を視野に入れ、土着の伝統を意識的に取り入れた17世紀以降の英語およびアイルランド語の文学作品を精査し、愛国意識の起源と言語文化の再構築の系譜を探求する。ナショナリズムの動向が国際情勢に重要な意味を持つ現代社会を念頭に、この研究を通じて「愛国」の今日的意味と方向性に示唆を与える。

3. 研究の方法

以下の要領で資料の収集・読解・分析を進め、最終年度に研究成果の総合、公表の準備。

17世紀の文献に基づいた土着の言語文化の変容と継承および愛国意識の起源の解明。

18世紀のアイルランド語文献と英語文献に基づく愛国者像の解明、土着の言語文化の再

構築の分析。

1922年の部分的独立に留意し、19世紀以降の英語とアイルランド語の文学作品における土着の伝統の再構築と愛国意識の関連性を分析。

アイルランド語使用地区でのフィールドワーク

～の作業は必要に応じて並行して行い、言語文化の再構築の意義についてアイルランドにおける歴史的な変遷を明確化する。アイルランドの事例の考察を深めるため、イギリス地域を中心に英語圏における英語以前の言語の文学・文化の再構築と民族意識の関連性を調査する。

4. 研究成果

土着の伝統を意識的に取り入れたアイルランドの英語およびアイルランド語の文学作品を精査した。とりわけ7世紀アイルランドの王スウィーニーをめぐる伝説に焦点を絞り、過去との対話を未来につなげる試みを分析した。調査の過程で20世紀初めに英訳されたスウィーニー伝説の重要性が明らかになり、この伝説に基づいた翻案作品を網羅的に調査し、精読した。近現代のアイルランド文学者たちはアイルランド語とその伝統に真摯に向き合うことによって逆にナショナリズムや愛国意識を越えたグローバルな観点を獲得し、長い目で今と未来を考える上で有効な視座を提供している。その詳細を徹底的に精査し、研究発表、講演、論文の形で公開した。

研究成果の集大成としての英語の著書をほぼ完成させた。タイトルは *Sweeney's Revival: Translating the Story of Liminality* 以下に内容の概略を章ごとに記す。

Introduction: Mad Sweeney: Anti-Hero from ancient Ireland

英雄ではなくアンチヒーローとしてのスウィーニー王の現代的意義を英雄クーフリンの伝説との比較において追及した。

1. Sweeney's influence on Yeats, Eliot, and Joyce?

アイルランドを代表する詩人イエイツ、小説家ジョイスの作品にスウィーニー伝説が潜んでいる可能性とその意味について検討した。

2. The Loss of Self: Austin Clarke's 'The Frenzy of Suibhne' (1925)

Austin Clarke の詩篇「スヴネの狂気」('The Frenzy of Suibhne', 1925 in *The Cattle Drive in Connaught*) はスウィーニー伝説に取材したおそらく最初の詩である。この詩に描かれた心象風景を精査し、失われているように見えて心の内部の奥深くに潜んでいるように見えるものへの詩人の執着を浮き彫りにした。分析と検討にあたっては、クラークの伝記、および詩が書かれた当時、独立して間もないアイルランドの社会情勢を視野に入れた。

3. 'The black earth my earth-bed': Sweeney, Bashō, and Others in Derek Mahon's *The Snow Party*

Derek Mahon の詩集 *The Snow Party* 所収の四篇の詩 'Epitaph for Flann O'Brien', 'The Snow Party', 'The Last of the Fire Kings', and 'A Disused Shed in Co. Wexford' を詳細に検討し、マホン

のペルソナの一つとしてのスウィニーの役割を検討した。松尾芭蕉、火の王、マッシュルームが詩には登場し、二つの世界の狭間で生きる苦悩とそれを昇華させる瞬間が詩には潜んでいる。北アイルランド紛争が激化するベルファストを逃れたマホンは、スウィーニーに自らを重ね、逃げてきたという罪悪感からの脱出の道を探った。自虐的なユーモアを潜ませた‘Epitaph for Flann O’Brien’は全詩集にも収録されておらず、ほとんど忘れた詩ではあるが、評価の高い‘The Snow Party’, ‘The Last of the Fire Kings’, and ‘A Disused Shed in Co. Wexford’ と重要な接点を持ち、重層的で奥深い詩であることを明らかにした。

4. In search for the lost Sweeney: Tom MacIntyre’s ‘Sweeney among the Branches’

トム・マッキンタイアはアイルランド語を自身のアイデンティティの原点、かつ創造性の源泉とみなし、アイルランド語に関わることに過剰とも言えるほどの期待を抱いた作家である。アイルランド語世界からは英語世界にはないエネルギーを得られるという信念が、マッキンタイアの創作活動の根底にある。マッキンタイアの短編「木の枝の合間のスウィーニー」(‘Sweeney among the Branches,’ 1982) は戦場で狂気に陥ったスウィーニーを現代に再現することによって、失われた国家の復興を掲げたテロ活動がいかにか人の心を蝕むかを浮き彫りにし、排他的な民族主義思想に基づくテロ活動の間を照射している。アイルランド語とその伝統に対する思い入れは過激な民族主義に通ずるというイメージもあるが、マッキンタイアはアイルランド語と民族主義の癒着を断ち切り、「部族間の暴力」によるトラウマの繰り返しに警鐘を鳴らしている。

5. The World Lost and Alive: *Sweeney Astray* and Seamus Heaney’s Challenge to the Death of Irish

Seamus Heaney (1939-2013) の『さまよえるスウィーニー』は古期アイルランド語の伝説『スヴネの狂気』(*Buile Suibhne*) に基づいている。この作品にヒーニーが取り組んでいた間、北アイルランドではイギリス系プロテスタントとアイルランド人のカトリックの間での抗争が激化していた。アイリッシュ・アイデンティティの象徴としてアイルランド語の政治的価値が否応もなく高まる中、ヒーニーは過激なナショナリズムから距離を取り、アイルランド土着の言語や伝統と自分自身の関係のあり方を模索していた。本章では原作からの顕著な逸脱に着目し、『さまよえるスウィーニー』の底流にあるヒーニーの葛藤と挑戦を探った。

6. Sweeney Resisting Authority: Self-reflective Revision of *Buile Suibhne* in Brian Friel’s *Molly Sweeney*

本章では Brian Friel の劇 *Molly Sweeney* (1994) がスウィーニー伝説の翻案作品であることの意味を探った。伝説が権力者との和解で終わるのに対し、劇は権力者との決別で結ばれるという決定的な違いがある。主人公のモリーは幼少期から視力を失った40歳前後の女性である。盲学校に通うこともなく、父を喜ばせることを生きがいとし、彼女の人生においては父親が絶対的な立場にあった。劇に登場する3人の男性は、モリーの父親も含め、キリスト教の神の戯画化というべき側面がある。劇には父権制度への批判的なまなざしが潜んでいる。父の死後もモリーの人生を束縛することになったのは、モリーに植え付けられた、愛するものを喜ばせたいという欲求だった。本章では、視力を得るためのモリーの手術の後の物語展開が、スウィーニー伝説に逆行することによって、モリーの真の解放を暗示するものになっていることを論じた。

7. Mother to be Grafted: Shadows of Mad Sweeney in Dermot Bolger's *A Second Life*

アイルランド人作家ダーモット・ボルジャーの小説『セカンド・ライフ』の根底にあるのは、失った過去との対話が何をもちたらしめるかという問いかけである。主人公ショーン・ブレイクは生後6週間で実母リズィ・スウィーニーから引き離されて養子となり、生母を知らずに30代半ばを迎えた男である。カトリック教会の管理下にあった母子保護施設を仲介とした不当な養子縁組の実態がこの小説の下敷きになっている。『セカンド・ライフ』には、7世紀アイルランドに実在したとされる王、スウィーニーのエグザイルの物語の翻案と呼ぶべき側面もある。生母の行方を探るショーンの葛藤に、作者ボルジャーのアイルランド語の伝統への複雑な思いがこたましている。アイルランド語はアイルランドの第一公用語ではあるが、ボルジャーを含む多くのアイルランド人にとっての母語は英語であるという現実がある。ショーンが生母との間に築こうとした絆、ボルジャーが模索したアイルランド語との関係、本稿ではこれらのパラレル関係を浮き彫りにした。

8. Revolutionizing Vulnerable Birds: Metamorphosis of 'the cursed king' in Paula Meehan's *Mrs. Sweeney*

詩人 Paula Meehan はスウィーニー王の妻に注目し、舞台を現代アイルランドに移して劇を執筆した。王に深く共感したミーハンは、彼の妻であるとはどういうことかに想像をめぐらせたのだった。スウィーニー夫妻は一人娘クリッシーを麻薬中毒とエイズで失った。作品の中心となるのは、正気を失い鳥のようなしぐさを取り始めるスウィーニー氏ではなく、妻リリーと彼女の女友達、娘クリッシーの女友達である。本章では女性たちを中心に据えることでこの劇が達成したことは何かに焦点を絞り、逆境をバネに生きようとする力強いリリー・スウィーニーが体現するものは何かの詳細を明らかにした。

9. Coda: The Death of Sweeney: Nuala Ní Dhomhnaill's 'Muirghil Castigates Sweeney'

アイルランド語女性詩人 Nuala Ní Dhomhnaill の詩篇 'Muirghil Castigates Sweeney' において、スウィーニーの呪われた死は自殺として演出される。伝説では一言も声を発しない女性 Muirghil がこの詩の唯一の語り手であり、死に至るまでのスウィーニーの様子を伝えている。Muirghil にはアイルランドの死の女神 Morrigan の姿が投影されている。スウィーニーの自殺の背後には、アイルランド語をめぐる現状への詩人の危機感が潜んでいる。詩人は古来のアイルランド語の神話、伝説、民話の魅力を十分に知り、強くそこに惹かれながら、「古いものの復活」という発想ではアイルランド語の未来は築けないという認識も強く持っている。詩人のアイルランド語への愛着と古い価値観への反発が、スウィーニーへの同情と距離感という両義的な感覚として詩のバックボーンになっていることを論じた。

Conclusion: Towards the liberation from a curse

アイルランド人作家たちは二つの世界の間で引き裂かれた狂気の王の苦悩に深く共鳴している。他方、Friel, Bolger, Meehan の作品においては、王の「呪い」からの脱出の可能性に焦点がシフトしている。スウィーニー伝説が未来の希望を探る契機となっていることは注目に値する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 池田 寛子	4. 巻 30
2. 論文標題 Mother to be Grafted: Shadows of Mad Sweeney in Dermot Bolger 's A Second Life	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人間・環境学』Human and Environmental Studie	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Ikeda	4. 巻 30
2. 論文標題 “ The whole world was alive ” : Michael Hartnett ' s Inchicore Haiku, Tao, and the Gaelic tradition	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Irish Studies	6. 最初と最後の頁 19-32.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田 寛子	4. 巻 26
2. 論文標題 現代アイルランド文学とアイルランド語の伝統 変身物語の再生と変容 日本ケルト協会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CARA	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田寛子	4. 巻 90
2. 論文標題 引き裂かれた心の行方 - 現代アイルランド文学におけるスウィーニー伝説の再生と変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英文学評論	6. 最初と最後の頁 23-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ikeda Hiroko
2. 発表標題 Female Voices in the Irish Song Tradition: reimagining bard/hero under the Union
3. 学会等名 IASIL Japan, The 36th International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田 寛子
2. 発表標題 現代アイルランド文学に息づくアイルランド語の伝統
3. 学会等名 日本ケルト協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田寛子
2. 発表標題 「現代アイルランド文学におけるスウィーニー伝説の再生と変容」
3. 学会等名 日本アイルランド協会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池田寛子
2. 発表標題 “The whole world was alive”: Michael Hartnett’s Inchicore Haiku, Tao, and Gaelic tradition
3. 学会等名 IASIL JAPAN 2017年次大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Hiroko Ikeda and Kazuo Yokouchi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 238
3. 書名 Irish Literature in the British Context and Beyond 21st Century Perspectives from Kyoto	

1. 著者名 池田寛子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 アイルランドフェューシャ奈良書店	5. 総ページ数 84-117 (260)
3. 書名 語り継ぐ力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------